

吃音と向き合い，つき合うことを目指して
—子どもとともに吃音について学び，考えることを通して—

愛知県岩倉市立岩倉南小学校 教諭 奥村 寿英

1 はじめに

岩倉市は名古屋市の北約10kmに位置し、人口は約4万8千人で小学校5校、中学校2校の小さな市である。岩倉市ことばの教室は2003（平成15）年に開設され、以来小学校を中心に自校通級と巡回指導を行ってきた。

平成24年3月現在、通級する子ども19名のうち、4名の子どもに吃音がある。この数字は開設以来、多少の増減はあったものの、ほとんど変わっていない。

本市には、保健センターや母子通園施設はあるものの、学齢期の子どもが利用できる通所施設や療育施設はない。来室する子どもは、それまでにどこにも相談に訪れることなく、ことばの教室に来室するケースがほとんどである。吃音で来室する子どもとその保護者も、吃音に関する予備知識がほとんどない状態でやってくる。ことばの教室は、相談窓口としての役割と、言語指導の場としての役割を担っている。この10年間、ことばの教室の担当者として吃音のある子どもに同行してきた。吃音についてどう考え、どもる子どもとどうつき合ってきたのか、その経緯を報告する。

2 「吃音」をどうとらえるか

吃音は100年近い研究の歴史があるにもかかわらず、未だに原因が解明されておらず、有効な治療法も見つかっていない。吃音の状態も人それぞれで、一般的に流布している情報の中には誤った情報も多い。たとえば、吃音は「ぼぼぼぼく」のように音を繰り返すものと捉えられることが多いが、実際には「ぼーく」と音を伸ばすものや、「・・・ぼっく」のようになかなか音が出てこないものも吃音である。また、緊張すると吃音は出やすいと思われていることが多いが、どもる人の中には緊張する人前で話すよりも、リラックスできる友達や家族との会話の方が吃音が出やすい人もいる。

吃音は、かつては「どもり」と呼ばれていたが、マスコミの自主規制によってこの言葉が使われなくなり、代わって「吃音」が使用されるようになった。しかし、「吃音」という言葉を知らない人が多く、一般的にどもる人の存在やその悩みもあまり知られていない。

吃音をあってはいけないもの、治すべきものと捉えれば、吃音の状態に注目することになり、これをなくそう、治そうとすることになる。しかし、吃音は一日の中でも状態は異なり、季節や場面、相手によっても変化する。子どもの頃ひどくどもっていた人が、大人になってほとんど目立たなくなることもある。吃音は変化するものであり、訓練をしたからといって消失するものではない。吃音をかくし、人との交流を避けているうちに、話すことから逃げ、なすべきことから逃げてしまうことが心配される。

吃音はその人の話し方の特徴で、その人の一部と捉え、話す内容やその人全体に注目すれば、吃音とどう向き合い、つき合っていくか、どう生きるかが課題となる。そのためにもまず、吃音を正しく知ること、自分の吃音について知ることから始めたい。そして、どもることで実際に起こる問題について、一緒に考え行動を支援する。さらに、将来の不安を少なくできるように仲間づくり、自己肯定感情の育成、他者貢献へつながるようにしていきたい。

3 ことばの教室での指導

(1) 基本方針

どもる子どもが自己否定に陥らないようにするために、どもるのは自分一人ではないことを知り、

自分の吃音に向き合うことで、どもりながらも話したいことは話そうとする態度を身につけられるようにする。

また、どんな状況や場面に出会っても自分の役割や責任が果たすことができるように、自分の吃音について説明できることを目指す。

(2) 実践の様子

① 吃音の相談

本市の場合、保健センターと母子通園施設はあるものの、大きな市とは違い、子ども発達支援センターや相談センターはない。地域で吃音の相談をできる場所は、ほとんどない。そのような状況の中で、ことばの教室が吃音の子どもの一次相談を担ってきた。入級に至らないまでも、保護者の相談にのったり、情報を提供したりすることもある。

今回のケースも、1年生時に一度相談を受け経過観察をしていたところ、2年生の2学期になって、子どもが「ことばの教室に通いたい」と希望して母親と一緒に来室した。

【母親との話】(T:担当者, M:母親)

T:今回はどうされましたか?

M:家に遊びに来る友達との会話を聞いていたら、このごろ会話のペースにだんだんついていなくなり心配になってきました。何かのときに、本人がぼそっと「小さいときにことばを直しておけばよかった」と言ったんです。ことばの教室へ行きたいかを聞いたところ、「行きたい」と答えたので、今だと思って来ました。

T:お姉さんどもるそうですね。

M:姉にも吃音があったんですが、今ではほとんどみられなくなっています。

T:教室での様子はどうですか?

M:仲のよい子はそういう話し方だと思っているので、変わりないと聞いています。

(以下略)

② どもる子どもとの出会い

【子どもとの話】(T:担当者, C:子ども)

T:この前来た時のことを覚えている?

C:うん。でもどんな話をしたかは忘れた。

T:どうしてここへ来たかわかる?お母さんに何か言われてきたの?

C:言いたいことがあっても、途中で止まっちゃうことがある。

T:そのとき、のどはどんな感じになっているの?

C:息が止まっちゃっている感じ。

T:それを「どもる」って言うんだけど、どもることで友達から何か言われたことある?

C:ある。悪口を言われる。2・3人だけ。

T:そういう時はどうするの?

C:「これは3歳ごろからのぼくの癖だからしょうがないでしょ」って言っている。

T:それでわかってくれるの?

C:ほとんどの人はわかってくれるけど、わかってくれない人もいる。

T:そっかー、わかってくれない人もいるんだね。話は変わるんだけど、自分のほかにどもる子に会ったことはある?

C:ない。お姉ちゃんは前、どもっていたけど。

T:この写真(「吃音ワークブック」の表紙)を見て。ここに写っている子のほとんどはどもる子だよ。大人の半分ぐらいもどもる人。

C:へー、大人でもどもる人がいるんだ。

T:どもる子どもと大人、ことばの教室の先生が全国から集まってキャンプをするんだ。だから、どもるのは君だけじゃないし、市内やこの学校にもいるよ。ことばの教室で勉強している子もいる。君もことばの教室で勉強してみるかい。

C:うん。してみたい。

③ 吃音について学ぶ

ア 吃音とは何か

「吃音ワークブック」を使って吃音について学習した。自分の吃音のタイプが、繰り返し、引き伸ばし、ブロックのうち、どれかを考えた。Aさんは自分は繰り返しが多いが、たまにブロックになることもあると答えた。次に、誰でもどもるような話し方をする場合として、「火事や急病であわてて救急車を呼ぶとき」や「自信がないことを急に質問されたとき」、「早口言葉などを早口で言うとき」を選んだ。また、歌を歌う時は、ほとんどの人がどもらないこと、どもりやすい音は人によって違うこと、吃音は常に変化していくことなどを知った。

ワーク③ どんなとき吃るか

問1 君は、どんなときに吃りますか。よく吃るときに○、あまり吃らないときに△をつけましょう。また、一番苦手なことを○として苦手度を、絶対吃りたくないを5として吃りたくない度合いを数字で書いてみましょう。

	よく吃るか	苦手度	吃りたくない度
1 友達と楽しく話しているとき	○		3
2 友だちに自分の気持ちや考えを言うとき	△		3
3 友だちと意見を交換しているとき	△		2
4 友だちとけんかをするとき	○		1
5 クラスで国語などの教科書を自読するとき	△		3
6 ひとりで家で自読するとき	△		3
7 ひとりで発表するとき	△		3
8 グループで発表するとき	△		3
9 知らない人に道を尋ねるとき	△	272	2
10 慣れぬ人にあいさつをするとき	△		3
11 順番があつて、先生に話しかけるとき	△		1
12 近所の人にあいさつをするとき	△		1
13 先生から話しかけられたとき	△		1
14 友だちに電話をかけるとき	△		3
15 友だちから電話がかかってきたとき	△		3
16 友だちを遊びに誘うとき	△		2
17 学校行事などで発表の前で話をするとき	△	3	3

【吃音ワークブック】

イ どんな時にどもるか

どんな時にどもりやすいかと、苦手な場面を、ワークシートでチェックした。よくどもる時は、「友達と楽しく話をしているとき」「友達とけんかをするとき」「学年が変わって自己紹介するとき」「日直の号令をかけるとき」「友達と朝や帰りに挨拶するとき」と答えた。苦手な場面は、「大勢の前で話をするとき」「自己紹介をするとき」「授業で当てられたとき」であった。「大勢の前で話をするとき」と「授業で当てられたとき」は、どもりたくない度合いも高かった。

ウ 吃音は治るか

吃音が治るとはどういうことかを三つの考え方を示して自分がどれに近いか考えた。

- (1) いつでもどこでも、まったくどもらない。
- (2) 意識的に吃音をコントロールすることができ、音読や発表がどもらずにできる。
- (3) どもるけれど、言いたいことを言い、したいことをする。吃音に悩まない状態。

Aさんは迷ったあげく、(1)と(2)に丸をつけた。「(1)はそうなればよいが、実際には難しいと思う。だから、(2)を目指したい」と言った。これは吃音に悩む子どもにしてみたら、正直な気持ちだと思う。しかし、現実的には(2)もなかなか難しい。Aさんは音読ではほとんどどもらないが、自分の考えを発表したり、友達と会話したりする時にどもる。今のところは、どもりながらも言いたいことは伝えられているようだ。今後、学年が進むにつれて悩みが深くなることが予想される。その時に話すことから逃げることがないように、吃音について考えることにした。

④ 吃音について考える

ア 吃音について分かっていること

吃音についてこれまで学習してきたことも含めて知っていることを紙に書き出した。「吃音(きつおん)」と紙の中央に書き、そこから線を引いて「くりかえす」―「か・か・か…」―「同じことを言う」―「言いたくない」のように続けていった。他にも、「人がみんなどもるわけではない」とか「1年生のころしゃっくりが止まらなかったから?」とか「緊張しすぎると声が出ない」―「おなかをたたくといい」とか「休みの日はどもらない」と書いた。

イ 吃音について分からないこと

一方、吃音について分からないことを書き出した。「なぜ自分だけどもるのか」、「音読の時はどうしてどもらないのか」、「どもる時とどもらない時があるのはなぜか」、「どうしてちゃんとしゃべれと言われるのか」、「なぜどもるのは治らないのか」など書いていた。

そこで、「どもる君へいま伝えたいこと」の目次を見て、自分の疑問と似ている質問を選んで、その回答を読んだ。Q3「どうして自分はどもるようになったのか」、Q4「自分のようなしゃべり方をす

るのはクラスで自分しかいない。自分だけか」について読み、分かったところに下線を引いた。さらに、それを要約して自分のことばで書き直した。

分かったことについて、「吃音の原因はまだ分かっていないこと」、「お母さんの育て方が悪かったわけでもないし、引越しをしたせいでもないし、妹が生まれて手がかかりすぎたわけでもないこと」、「大人になってどもる人もいること」などをまとめた。「どもるのは自分だけか」の問いに対しては、「どもる人の世界大会が開かれたこと」や「100人に1人はいること」を答えにあげていた。どもる人は500人に1人ぐらいだと思っていたそうだ。

ウ 学習・どもりカルタ

「学習・どもりカルタ」で遊んだ後、自分が気に入ったカルタを五つ選んだ。

- ・ ユーモアはどもるぼくらの強いぶき まねやからかいを切り返す
- ・ 「やもり」と「いもり」とそれから「どもり」みんなちがってみんないい
- ・ 手をあげる 当たらぬようにと いのりつつ
- ・ ママは平気と言うけれど やっぱり私ははずかしい
- ・ ほっとした 当てられる前に チャイム鳴る

これらの句一つ一つについて、なぜそれを選んだのか理由を話し合った。その後、自分でもカルタを作ってみた。

- ・ がんばるぞ 学芸会は どもらない (学芸会を前に)
- ・ 動物は 知らないうちに どもるかも (動物もひょっとしたらどもっている?)
- ・ ボーリング どもるとまさか ストライク (どもってボーリングの球を投げたらストライクだった)

少しずつではあるが、自分と吃音の関係を分析的にみて表現することができるようになってきた。

⑤ 日本語の音とリズム

吃音に対して、ことばの教室でできることの一つに、日本語のリズムに親しむことがある。日本語の音は、基本的に「あ・い・う・え・お」の5つの母音と[k], [s], [t]などの子音の組み合わせで構成されている。母音の流れを一音一音意識して発音することにより、日本語の一音一拍のリズムが生まれる。

日本語のリズムを練習する教材として、詩は適している。長い文章を読むのが苦手な子どもでも、短い詩なら取り組みやすく、暗唱することができる。ことばの教室でよく取り上げる詩には、以下のようなものがある。

○谷川俊太郎

「かっぱ」「いるか」「ののはな」「日本語のおけいこ」「きりなしうた」など

○まどみちお

「しょうじきショベル」「はひふへほは」「あいうえお」など

○工藤直子『のはらうた』より

「おれはかまきり」「おがわのマーチ」「なつがくる」など

○阪田寛夫

「年めぐりーしりとりのうたー」「おとなマーチ」「ちこく王」など

○金子みすゞ

「大漁」「こだまでしょうか」など

Aさんとは「年めぐりーしりとりのうたー」や「こだまでしょうか」などを一緒に読んだ。一行交代



【音読テキストおよび詩集】

で読んだり、一人で読んだりした後、暗唱した。リズムよく朗唱することができた。

⑥ 吃音について伝える

これまでことばの教室で学習してきたことを、在籍学級で発表することをAさんに提案してみた。初めは迷っていたが、クラスみんなに自分のことを理解してもらうよい機会と考え実施することにした。発表内容はこれまで読んできた詩の中から、金子みすゞの「こだまでしょうか」の音読、ことばの教室で勉強したことについて書いた作文の発表、特技としてヨーヨーの技を披露することにした。担任に今年度最後の通級指導の時間に発表させてほしい旨を伝えると、快諾してくれた。また、保護者にも発表内容を伝え、賛同を得た。



〔発表の様子〕

発表の当日は、授業の前半にことばの教室でリハーサルを行ってから在籍学級へ赴いた。担当者から発表する目的と内容を簡潔に紹介してから、発表を始めた。「こだまでしょうか」を一人で音読した後、クラス全員に詩を書いた紙を配り、一緒に読んだ。次に、ことばの教室で勉強したことについて書いた作文を読んだ。

ぼくはことばがどもります。どもるといのは、同じことばをれんぞくで話すことです。他にも音がつまる人とのぼす人がいます。どうしてどもるようになったのかは、わかっていません。ぼくは1年生の初めぐらいに気づきました。お母さんの育て方が悪かったわけでもないし、ひっこしたせいでもないし、妹が生まれて手がかかりすぎたわけでもありません。げんいんはまだわかっていません。3才ぐらいからどもり始める人が多いけど、高校生や大人になってからどもる人もいます。どもる人は100人のうち、1人はいます。この小学校には、約6人はいることになります。ぼくがどもった時は今までどおりにしてください。授業の時はふつうに聞いてください。これで終わります。

どもることについて、みんなに知っておいてほしいことや、特別扱いをしないでこれまで通り接してほしいことを伝えることができた。

最後に、自分の特技としてハイパーヨーヨーの技を五つほど披露した。終わった後に、子どもたちに感想を書いてもらった。

- ・ Aさんが何をことばの教室でやっているか、何が特技かがよく分かりました。勉強したことの発表で、どうして同じことばをくり返してしまうかが分かっていないので、早く分かるとういと思います。
- ・ Aさんはしゃべるのが苦手だけど「こだまでしょうか」の詩を上手に読めていました。別の詩も聞きたくなりました。Aさんが発言する時、まちがえてもいつも通りにしようと思いました。Aさんは100人の中の1人だと知りました。
- ・ Aさんはくり返してことばをしゃべってしまうけど、そんなの気にしていません。Aさんはいつも明るくて元気ないい友だちです。Aさんはことばの教室で詩を読んだりしているんだなと思いました。最近、ぼくが習いごとに行き始めて遊ぶきかいがへっていたけど、もっと遊びたいです。

子どもたちの感想の中に、Aさんがことばの教室でどんなことをしているのか、Aさんの得意なことがよく分かった、これまで通り一緒に遊んだり接したりしていききたいというものが多くみられ、Aさん自身のことと、Aさんがどもることについての理解を深めることができた。

(3) 実践を振り返って

Aさんは吃音に関する事実について学び、どもるのは自分一人ではないこと、大人でもどもる人はいること、吃音には三つのタイプがあり、どもる場面は人によって違うことを知った。さらに、吃音が治るとはどういうことかについて考え、自分が吃音についてどう考えているか調べた。吃音について分かっていることと、分からないことを紙に書き出して眺め、吃音の原因はまだ分かっていないこと、世界中どこの国にも1%の割合で現れることを学んだ。そして、「学習・どもりカルタ」を通して自分と吃音の関係を表現することが少しできた。

また、短い詩を声に出して読むことで、日本語のもつ音の響きとリズムに親しみ、はく息にのせて声を出すことができた。最後にこれまで学習した成果を在籍学級で発表し、自分の吃音について考えたことを作文に書いて読むことができた。

これらの取り組みを通して、Aさんは今後クラスが代わったり、環境が代わったりしても、自分の吃音について話し、周囲に理解を求めることができるであろう。

(4) 吃音と向き合い、つき合っていくために

これまで吃音について学習して、吃音に関する事実を知ることができた。しかし、その理解はまだ浅いものにとどまっている。大勢の前ではどもりたくない、授業で当てられて答える時はどもりたくないという子どもについては、「どもりたくないのはなぜか、吃音をどう捉えているのか」ということについて、もう少し掘り下げて考えていきたい。

最近「当事者研究」に注目している。「当事者研究」とは、北海道浦河町にあるべてるの家と浦河赤十字病院で始まった、主に精神障害当事者やその家族を対象とした、アセスメントとリハビリテーションのプログラムである。「当事者研究」では、自分の否定的な面に対して、肯定的な、自分がよりよく生きていくための側面を作っていこうとする。これをことばの教室に通ってくる子どもたちとともにできないか考えている。

今回の実践では、自分の吃音について考え、まとめたことを、在籍学級の子どもに対して発表することができた。これは担任の先生の協力と保護者の理解によるところが大きかった。仲のよい友達に支えられながら発表できたことは、本人にとって大きな自信につながったと思う。今後も、機会をとらえて在籍学級への働きかけを行っていきたい。

4 おわりに

吃音と向き合い、つき合うことを目指して実践を重ねてきた。Aさんについては周囲へ働きかけ、子どもと吃音についての理解を広げることができた。しかし、それはその子どもが通級している学校・学級にとどまっている。どもる人は100人に1人という割合からすると、通級はしていないが吃音がある子どもは他にも存在しているはずである。そのすべての子どもが吃音に悩んでいるわけではないだろうが、相談できる場がほとんどない本市の現状では、ことばの教室が当面その役割を担っていかなければならないと考えている。先日も、知り合いの先生からの紹介で他市に在住している保護者からの相談があった。電話での対応であったが、少しでも子どもと保護者の問題が軽くなり、役に立てば幸いである。

今後もことばの相談窓口として、言語指導の場として、担任の先生と協働して子どもと保護者に寄り添っていきたい。

【参考図書】

- ・「どもる君へ いま伝えたいこと」伊藤伸二 解放出版社（2008）
- ・「吃音ワークブック」伊藤伸二・吃音を生きる子どもに同行する教師の会編著 解放出版社（2010）
- ・「学習・どもりカルタ」日本吃音臨床研究会発行（2010）
- ・「朗読・群読テキスト」（正／続）小池タミ子・上條晴夫編著 民衆社（1995／1997）
- ・金子みすゞ童謡集「わたしと小鳥とすずと」JULA 出版局（1984）